

ボランティア活動報告2018

「高校・大学間連携 関上バスツアー合同学習会」

7月22日(日)に「高校大学間連携 関上バスツアー」が行われました。関上バスツアーは尚絅学院大学が毎年行っている活動で、今年5月にも他大学との合同学習会として開催されました。今回は宮城にある尚絅学院高校と福島にある桜の聖母学院高校の皆さん、そして尚絅学院大学の学生が参加し、「あの日あの時からを振り返り、これからを考える」をテーマに、関上の視察やワークショップを行いました。

両校の高校生の皆さんにはバスツアーの開催にむけて事前学習会を行いました。特に、尚絅学院高校には大学生が外向き、ボランティアチーム TASKI の活動紹介や、関上を見学する上でぜひ知っておいてほしい「仮設住宅」と「復興公営住宅」の2つのキーワードについて説明しました。



バスツアー当日は天候にも恵まれ、ボランティアチーム TASKI の学生スタッフを中心に、尚絅学院高校から12名、桜の聖母学院高校から9名参加し、教職員も合わせて計38名が参加しました。

まず訪れたのはゆりあげ港朝市。日曜日ということもあり、県内外から訪れた観光客でにぎわっていました。朝市には特産の赤貝やカレイなど多くの海産物が並び、中でも学生たちの興味を引いたのが「ホヤ」。海のパイナップルとも呼ばれており、宮城や岩手では

メジャーな食べ物ですが、福島の高校生は初めて見るホヤに少し驚いたようです。

名物の競り市を見ながら焼きウニやかき氷を食べるなど、活気ある朝市の雰囲気を存分に楽しむことができました。



次に向かった日和山では、語り部の長沼俊幸さんから震災当時のお話を伺いました。「家や家族を失った悲しみや喪失感も災害のひとつなんだ」という長沼さんのお言葉から、「復興」という言葉の意味を考えるきっかけとなりました。



午後からは大学に移動し、ボランティアチーム TASKI の活動発表と、震災前と震災後の閉上地区の状況について長沼さんにお話していただきました。



「新しい街づくりが進むということは昔の街並みが無くなるということ。住みたい街をつくるには皆で声をあげて話し合うことが大切。」と力強くおっしゃいました。

そしてバスツアーの締めくくりとして「これからの世代に震災の経験を伝えるには」をテーマに、ワークショップを行いました。悩みながらも、自分の目で見てきた閉上の様子や語り部さんのお話を元に、真剣に対話に取り組む様子が見られました。



ではここで、実際にグループディスカッションで出た学生の意見を一部ご紹介します。

これからの世代に震災の経験を伝えるには？

- 震災の学び直しをする。
- 今日得た学びを身近な人へ伝える。
- ボランティアに参加する。
- 地域交流の時間を多くする。
- これからも足を運び、たくさんのことを学び伝える。
- 今日のことをしっかりと記憶して、いつか自分の子どもに教えたい。
そしてまた閑上に訪れたい。
- Learn from history, Build for the Future. 一歴史から学ぶことがあるー



そのほかにもたくさんの意見が出ました。短い時間でしたが、学年と学校を超えた非常に有意義なワークショップとなりました。

今回のバスツアーは、閑上に向かうバスの中でガイドを行ったり、お昼休みに大学のキャンパスツアーを行うなど、ボランティアチーム TASKI の学生が中心となってプログラムを進めました。今までとは違い、スタッフとして活動に参加するのは初めての経験だったので慣れないことも多々ありましたが、改めて「伝える」ことの難しさと重要性を感じることができました。

今後も私たちはこのような学習会の場を作っていくとともに、被災地に寄り添った支援活動を行っていきたいと思います。

文：人間心理学科 4 年 齋藤千愛（連携交流課 ワークスタディ学生）